

## Gandhari Dharmapada について

水野 弘元

## 一

昨年春頃 John Brough 教授によつて出版された The Gandhari Dharmapada の紹介批評を依頼されて、評者の怠慢から、今日まで延びたことをすまなく思つている。本書は俗語法句經 (Präkrit Dharmapada) の完全な研究出版である。

周知のように、法句經類で現存するものは、(一) 南方上座部で傳えているパーリ語法句經二六品四二三偈 (漢譯法句經二卷中の主要部分もこの法句經の系統に屬する)、(二) 説一切有部で傳えているウダーナ品 (Udāna-varga)、これは梵本には完全なものは存在せず、中央アジアから發見された斷片が獨・英・佛等にかなりの程度存在するが、漢譯としては法集要頌經四卷はその全譯であり、出曜經三十卷はその註釋書である。チベット藏經の中にも、全譯二部、註釋一部が存在する。全體の偈數

は梵・漢・藏の諸本何れも一致しないが、大體三三品九五〇偈内外から成つている。(三) がここに紹介する俗語ガンダーラ語の法句經である。以上三種の他に、梵文大事に引用されている大衆部の法句經とか、漢譯經論等の中に引用又は言及されている法句經とか、數種のものがあつたらしいが、現本としてその大部分が残存しているのは右の三種である。また漢文の中に偽作の法句經があるけれども、これは右の法句經類とは性質を全く異にした別個のものである。

ところで俗語の法句經は、現在の著者ものゝけるように、一八九二年にフランスの探險旅行者 Dutreuil de Rhins と F. Grenard が中央アジアの Khotan から二一料隔つた Kohmarī Mazar (カラカーシユ河の溪谷にある) 地方で、土民から買ひ取つたものである。ここは昔の Gosīnga vihāra (牛角精舍) の遺跡の地で、法句經の寫本はこの寺から出

たと傳えられている。この寫本はフランスに送られたが、恐らく同じ頃に、この土地で、同じ寫本の他の部分が、この地方、カシユガルにおけるロシア總領事 N. Th. Petrovskii によつて得られ、露都ペテログラードに送られた。何れも樺の皮にカロシユティー文字 (Kharoshthī) で書かれたものである。

フランスの寫本は E. Senart によつて、ロシアの寫本は S. Oldenburg によつて、別個に研究され、それが偶然にも一八九七年秋のパリでの第十一回國際東洋學會で別々に發表され、兩者が同一作品の部分であることが始めて知られた。翌年 Senart はロシアの寫本の一部分の寫眞の提供をも受け、その兩者を Journal Asiatique に發表した。かくてこの法句經についての一應のことは判明するに至つた。

その後、H. Lüders, R. O. Franke, Jules Bloch, Sten Konow, H. W. Bailey 等の多くの學者が、その讀み方について貴重な研究を發表し、またガンダーラ地方の俗語についても、右の人々の他に E. G. Rapson 等によつて研究がなされ、それら多くの研究の積み重ねを綜合改善し、現存する本經寫本を全體的に網羅集成し研究解説したのが本書である。

寫本の解讀については、例えは斷片A<sup>4</sup>の第三、第四偈及びA<sup>3</sup>の第一三、第一六偈について、Senari のものゝ本書のものを比較して、

Senari A<sup>4</sup> 3 yasa etadiśa yana

gihī parvaitasa va  
sa vi eīna yeṇena  
nivanaseva satie.

A<sup>4</sup> 4 suprauḍhu praujhati

imi gotamaśavaka

yeśa diva ya rati ca  
nica budhakata smati.

A<sup>3</sup>13 eta viśeśadha ḥatva

apramadasa panito  
apramadi pramodiā  
ariāna goyari rato.

A<sup>3</sup>16 pramadā apramadena

yada nudati panitu  
praṇaprasada aryu  
aśoka śōino jana  
pravatatho va bhumaḥha  
dhiru bala avechiti.

Brough A<sup>4</sup> 3 yasa edadiśa yana

gihī parvāidasa va

Gandhari Dharmapada 2702 (水野)

sa vi eīna yeṇena  
nivanaseva sadiā.

A<sup>4</sup> 4 supra'udhu pra'ujadi

imi godama-śavaka  
yeśa diva ya rati ca  
nica budha-kada svadi.

A<sup>3</sup>13 eḍa viśeśadha ḥatva

apramadasa panido  
apramadi apramodiā  
ariāna goyari rato.

A<sup>3</sup>16 pramadū apramadena

yadha nudadi pranidu  
praṇa-prasada aruśu  
aśoka śō'ino jana  
pravada-īho va bhuma-īha  
dhiru bala aveksidi.

なっている。この比較によつても判るように、全體的に云えば、兩者は大して相違がないようであるが、細かい點ではかなりに違つている。これは一九世紀末から今日までの間に、カローンシュテーイ文字の讀み方が微細な點まで正確になつたことを意味するものであり、これが引いてはその言語の音韻や語法の研究において、大きな進展がなされたことを意味している。

恐らく最初は右の諸偈に相當するパーリ文や梵文を参照し、それから推して不明な文字を讀解したものとされる。それが、この文字で記載された他の資料がいろいろ發見され、それらが比較研究されることによつて、次第に正確な讀み方が判ると共に、ガンダーラ語という今まで未知であつた俗語の音韻や語法等の言語學的知識も明らかとなり、兩々相俟つて、今日のような確定的な結果が得られるようになったのであらう。

ガンダーラー(Gandhari ガンダーラ語)と云う名稱は H. W. Bailey に於て始めて使用されたものであつて、この言語で書かれたものとしては、古くはアッシューカ王法勅文の中、西北印度の Shahbazgarhi & Manshra にあるカローンシュテーイ文字による勅文がそれであり、次いで西紀前一―後二世紀頃のものと、西北印度發見のカローンシュテーイ文字の刻文や貨幣の文、更には三世紀頃の Niva その他の中央アジアから發見された同文字の文書がそれである。この言語は右の諸資料の間でも、地域的年代的に多少の異同があるときれる。因みに最近著者は洛陽から二、三十年前に發見された寺の井桁の石に彫刻された同文字の斷片を研究し、右の諸資

料との比較によつて、これを後漢末頃に刻されたガンダーラ語であるとされている。<sup>(4)</sup>

佛教聖典としては、ガンダーラ語で書かれたものは、この俗語法句經だけしか現存していないが、會つてはこの語で書かれた佛典が數多く存在したであろうと想像され、それらの聖典が漢譯されて、現に漢譯藏經中に含まれているであろうとされる。

著者は E. Waldschmidt 等の研究を参照して、漢譯藏經中で、法藏部所屬とされる長阿含經には、ガンダーラ語の特徴が見出されるとしている。例えば Ajita を阿由陀 (Ayuda) と音譯しているのはそれである。特に長阿含大會經には音譯語が多く、パーリの vaca を vāya ㄱᄃᆞᆫ, vairocana を veroyana とする例は他語にも見出されるが、その原音が ve-macitrū, sucitri, abhāmi (abhravī) であつたと見られるようなものは、確かにガンダーラ語的である。また梵・巴の原語では *u, th, d, dh* の音であるのに、これに對してすべて「陀」の譯語が當てられている場合が三五例もあるが、これも原本がガンダーラ語であつたことを思わせるものである。その他、音譯語から idana (P. idāni, S. idānim), acuda (P. accutā), adha (P. atha), jida (P. jita),

(P. accutā), adha (P. atha), jida (P. jita),

Bhadraṇu (P. bhaddan te) とか samana, miṣa (mīṣra), śeṭhi (śreṣṭhan) とかの語が推定される場合もガンダーラ語的である。しかし例えば俗語法句經では pradhavi であるのに、大會經では pīhivi と推定されるのは、兩者で異つてゐる。長阿含の音譯語を詳細に研究すれば、その他にもこのような例は少なくないであろう。評者が氣付いたものに「周那」があるが、これもパーリ語の Cunda ではなく、ガンダーラ語の Cuna を譯したものであろう。實際において、長阿含に限らず、古譯や舊譯時代の經や律の中には、ガンダーラ語的な音譯語をもつたものが多いかも知れない。この點は今後詳しく研究が進めらるべきである。

さて法藏部所屬の長阿含經にガンダーラ語的なものが多く見出される所から、著者はこの俗語法句經は法藏部所屬ではないかと推測している。この點はなお法藏部の四分律とも比較し、一層その確實性を深める必要がある。

1 これらの法句經類に關しては本書にも一應觸れられているが、詳しくは拙稿「ウダーナと法句」(駒澤大學學報復刊第三号、昭和二八・三月)を参照。  
2 俗語法句經については、拙稿「俗語法句經について」(駒澤大學研究紀要一九、昭和三六・三月)を参照。  
3 H. W. Bailey: Gandhari (BSOAS Vol. XI,

4. 1946, pp. 764-97).  
5 J. Brough: A Kharosthi inscription from China (BSOAS Vol. XXIV, 3, 1961, pp. 517-30) 會つてこの刻文は、パーリ語の *saṃvāsa* であると考へてゐたが、著者はこの論文によつて、その出處目録をこのことを指摘した。

5 E. Waldschmidt: Bruchstücke buddhistischer Sūtras aus dem zentrasiatischen Sanskritkanon, I. Leipzig 1932.

著者によれば、この法句經が書かれてゐるカローシユティー文字は、その書體から見て西紀後一—二世紀頃に比定され、現在の所では二世紀のものだとされている。それは西北印度から發見されてゐる二世紀頃の Kuran casket や Wardak vase の書體に類似するからである。

本書が俗語法句經について、従来の諸研究よりも大いに改善されている點は、右に見たようにカローシユティー文字を正確に讀解し、年代を定めたり、本經のガンダーラ語について詳しい研究をしたりしたことにあるが、更に本經の内容なり組織なり偈數なりについて、全體的立場から考察している點も、從來見られなかつたすぐれた新しい研究である。

オックスフォードに保存されている寫

本断片の整理についてであるが、フランスの断片はA<sup>1</sup>-A<sup>4</sup>、B、C、その他の小片から成り、ロシアの断片はM、N、Oから成っている。ロシアの断片で従来發表されているのはOだけで、M、Nは本書によつて始めて發表されたものである。またフランスの断片の中にも Senart によつて發表された断片が本書には収められている。断片の中には、經文が樺皮の片面だけに書かれたものと両面に書かれたものがある。CとNは両面書きで、その他は片面のものである。これらの断片の配列順序等については、従来殆んど知られなかつたが、著者は断片Nの表にある双要品(Yama<sup>ka</sup>)の最後にある攝頌(uddana)

brama i bhikhu tasina i pavu  
araha magena ya apramadu  
cita ji balu adhava jara i  
suhena theru yama<sup>na</sup> tresa<sup>sa</sup>.

(1)婆羅門と(2)比丘、(3)渴愛と(4)惡、(5)阿羅漢と(6)道と、(7)不放逸なるものと、(8)心と(9)愚と、また(10)老と、(11)樂と(12)長老と(13)双要とで十三である。によつて、婆羅門品以下双要品までの十三品がその順序の如く連なつてゐることが判り、これに從つて寫本を配列した。

Gandhārī Dharmapada 𑖀𑖩𑖫𑖪𑖩𑖫𑖪 (水野)

それは断片Oから始まり、MからBへ繋がること知られ、MとBはその中間が左右半分宛に裂けている。以上三つの断片に最初の婆羅門品五〇偈、比丘品四〇偈が収められている。各品の偈数については、その品の最後に一々明記されているから、その部分が残つてゐる限り、偈数は明瞭である。

次に(三)渴愛品、(四)惡品、(五)阿羅漢品の部分Xとする。次が断片Aに移るが、これはA<sup>4</sup>、A<sup>3</sup>、A<sup>2</sup>、A<sup>1</sup>の順序に置くべきであり、そこに(六)道品、(七)不放逸品がある。道品は最初の七偈はXの部分に含まれていて、今は第一八偈から始まつてゐる。A<sup>1</sup>の後方には、極めて不完全な部分があつて、ここには(八)心品の一部が断片的に面影を残している。この心品の大部分と(九)愚品の全部、(一〇)老品の最初の部分は失われている。この部分は失われた断片Yに存在したに相違ない。要するに断片X、Yは佛、露の何れにも將來されることなく、今日では全く失われているのである。

次に断片Cに移るが、ここには両面に法句經が寫されている。その表面には(一)老品の大部分(最初の部分はYに含まれてゐる)、(二)樂品の全部が含まれ、次いで断片Nがこれに

續くことになる。ここにも両面の書寫があり、表には(三)長老品、(四)双要品及び恐らく(五)當賢哲品が全部含まれてゐる。前述のように、双要品までが法句經の前半であろうと考えられ、以下が後半に及ぶらしい。後半の品數、品名等は、その最後の攝頌の部分が存在しないため不明である。しかし今まで配列したO、M、B、X、A、Y、C、Nで断片は全部であるから、今までのものを裏面へ辿つて行けば、その順序に法句經が續いている筈である。

この意味で、Nの表面が(四)賢哲品で終り、Nの裏面は(五)多聞品、(六)雜品、(七)念品と續き、それからCの裏面に移つて、(八)華品、(九)千品、(一〇)戒品、(一一)所作品、(一二)象品又は馬品に及んでゐる。この最後の品は最初の二偈の断片だけしか残存せず、その後は失われた断片Yの裏面にあつたらしく、この部分に法句經の最後の部分が全部含まれていたらしい。それが幾品、幾偈であつたかは全く知りようがない。とにかく上述の通り、不完全でも、その品の偈が多少でも残存している品は一九品で、その他は全く存在しない。

以上の法句經の位置や順序を比定し始めたのは Liders 及び J. Filiozat らしく、それをうけて著者がこれを完成させたものである。

三三三

Gandhāri Dharmapada 26 (水野)

三七四

mapada, pp. XXIII-XXIV).

三

この寫本は長を二〇種前後、幅四―五種の樺皮を横に並べて兩端で綴じ、元來は一枚の長い帯状のもので約五米あつたらしくと推定される。この五米が前述のような順序で配列され、先ずその表面に上方〇の部分から書いて下方に及び、最後のNまでで第一四品を終り、それから裏に移つて、裏面は全長の半分以下で法句經が終つてゐたものらしい。各品の偈數は前半が多かつたらしく、前半でも初めの方が最も多く、次第に減じて、後半の諸品では二〇偈以上のものはなかつたらしい。

今その品名と、その品の偈數の確定してゐるものを表示すれば次の如くである。

1. Brāhmaṇa (brama) (50)
2. Bhikṣu (bhikhu) (40)
3. Tīṣṇā (tasiṇa)
4. Pāpa (pavu) (全數)
5. Arhant (araha) (全數)
6. Marga (magu) (30)
7. Apramāda (apamadu) (25)
8. Cita (cita) } 悉らく (50)
9. Bāla (balu) }
10. Jarā (jara) (25)
11. Sukha (suhā) (20)
12. Sthāvira (theru) (19)

13. Yamaka (yama'a) (22)
14. Paṅḍita) (19)
15. [Bahūsruta] (16)
16. [Prakṛinaka?] (15)
17. [Krodha] (16)
18. [Puṣpa] (15)
19. [Sahasra] (17)
20. [Śīla?] (10)
21. [Kṛtya?] (9)
22. [Nāga or Aśva?] 23—26 (全數)

著者は、パーリ法句經のように二六品ではなく、或は二七品又は二八品まであつたかも知れないとも云つてゐる。要するに寫本の樺皮の長さ、品中の偈數と、またパーリ法句經の品中の偈と俗語法句經の現存部分の相應品中の偈の一致相應するものの數の比例等から推して、俗語法句經は全體では五四〇偈内外のものであつたらうとしてゐる。従つて現存三五〇偈程は全體の八分の五に當り、約八分の三がX、Yの中にあつて、失われているとされる。

1 S'vain Lévi は全體は七五〇偈程であつたらうと云つてゐる (JA. 1912, p. 222) Barua, Mitra は六〇〇偈に近かつたものと云つてゐる (The Prakrit Dham-

以上が著者によつて本書の序論の中で論せられてゐる所の概略であるが、本書の構造内容を簡単に紹介すると、本書は目次に次いで詳細な参考文献表、略字表を掲げ、關係文獻は分類して網羅されてゐるから極めて便利である。次のはしがきに次いで、一一八頁に及ぶ詳しい序論がある。序論は第一部と第二部に分け、第一部では、(一)俗語法句經の發見とこれに關する研究發表や出版の情況、(二)現存部分とその整理について、(三)パーリ法句經、ウダーナ品と俗語法句經との關係一般論、(四)右以外の法句經テキストについて。ここでは大事引用の法句經、漢譯法句經類の四種、法救とウダーナ品、俗語法句經の冒頭にある Buddha-varma (Buddha-varman) の名はウダーナ品における法救 (Dharmatrāta) の如く、その撰集者を意味するものではなく、單に本書の筆者又は所有者にすぎないであろうことを論ずる。(五)ガンダーラ語法句經の部派所屬に關して。ここでは本經が根本説一切有部所屬ではなく——有部毘奈耶雜事の中に、語法の誤つた法句偈を指摘してゐるが、これ

は本經に類する俗語的のもので、有部はこの俗語的法句經を他派のものとして紹介しているから——、法藏部か飲光部あたりのものかも知れないとする。(六)ガンダーラ語について。その言語の存在、及び前述の如く、漢譯長阿含におけるガンダーラ語的要素を指摘し、この法句經が長阿含と同じく法藏部所屬であろうと推論する。

以上で序論第一部を終り、第二部では(一)——(四)では本寫本におけるカローシュティ文字の寫字法について、全體的立場から詳論がなされ、(五)——(六)では、本經の音韻論、語形論等の言語的文法的問題が取扱われている。この第二部の部分は極めて専門的のものであるから、今はその紹介を略することにした。

序論の後に法句經本文が掲げられている。ここでは前述の整理された順序に従つて、一々の偈をローマ字化して、五七頁に亘つて示している。その各頁で、左半には俗語法句經の本文がある。そこには現存經を順次に通し番號で示し、また各偈の終には、その品の偈番號と佛・露寫本の斷片による番號とを掲げて、その所屬を明示している。各頁の右半には、左方の偈に相當する巴・梵の偈を掲げている。もしパーリ法句經に相當偈があれば、

Gāndhāri Dharmapada २०१५ (水野)

パーリ法句經の通し番號の下にその偈を掲出し、ウダーナ品にも相當偈がある場合には、右下にその品數、偈數を番號で示している。この場合もウダーナ品のチベット本(T)、その英譯(R)の偈番號が梵本のものとは違つてゐる時にはこれも示している。またパーリ法句經になくて、他のパーリ聖典中に相當偈がある場合には、このパーリ偈を右側に掲げている。さらにパーリの中に相當偈が見出されない時には、ウダーナ品の梵文の相當偈を、もし梵文もまだ發表されていないものでは、藏文を出している。これらのウダーナ品はパーリ相當偈を出した後に掲げられていることもある。また梵文 Mahāvastu と Divyāvadāna の相當偈を示している場合もある。パーリ相當文においては、偈全體だけでなく、半偈や一句等のものまで掲出されている。これらの巴・梵・藏の相當偈の指摘も、先人の研究を受けて、著者がこれを綜合大成させたものである。

なお俗語本文の文中に、細かい數字が付記されているのは、その部分が寫本のどの部分から來ているかを示すものであつて、寫本は本書の卷末に、些細な斷片に至るまで、細大洩らさず寫眞版によつて掲出され、寫本中の

一々の偈又は行や語句に對して、一から五六に及ぶ通し番號が付けられ、その番號が本文の中の細かい數字と一致するようになつてゐるから、幾つかの斷片が寄せ集められて一偈に復原されている場合には、その斷片の番號によつて、それが寫本のどの部分から來ているかが判明するのである。これによつて、本文の判讀には一字一句のごまかしもないことを證據立てている。

本文に次いで一〇六頁に及ぶ細字の註釋がある。これは本文について、寫字的、文法的な註釋説明を施したものであつて、それは巴・梵・藏・西域諸語等との比較の上から論ぜられている。この部分は各偈の詳しい研究のためには極めて重要なものである。

次いで三つの Concordance がある。第一は寫本の斷片又は、行の番號と俗語法句經の偈の番號との關係を表示したものであり、第二はパーリ法句經四二三偈の一々とこれに相當する俗語法句經の偈を番號によつて表示したもので、第三はウダーナ品の品數、偈數とそれに相當する俗語法句經の見出されるものを、その偈番號によつて表示したものである。これらによつて、俗語法句經とパーリ、梵文法句經との相應關係が一目瞭然となつて來る。

三七五

次に二種類の索引がある。第一は俗語法句經のすべての語彙が、それに相當する梵・巴語と共に、その語彙の存在する偈番號を掲げて、配列されている。これは一種の辭書的なものであつて、極めて便利で貴重なものである。第二は俗語法句經以外のガンダーラ語、コータン語、フラークリット、パリー語、梵語等で、本文や序文の中に出ている語彙を言語別に配列した索引である。

次に俗語法句經三五〇偈程の第一句に相當する巴・梵の偈の第一句を印度のアルファベット順に配列し、これに俗語法句經の偈番號を付したものである。この句の中で括弧に圍まれているのは、現在パリーにも梵文にもその相當偈が見出されないもので、將來発見される便宜のために、俗語をパリー語形に移して、その第一句を掲げたものである。

最後に寫本の寫眞版が掲げられている。これは斷片Oが二頁、Mの表面が二頁、Bが二頁、Aが二頁、Cの表面が二頁、Nの表面が三頁、裏面が三頁、Mの裏面が二頁、Cの裏面が二頁、A及びBと共にあつた細片が二頁、Cの細片が二頁、計二四頁から成つてゐる。これによつて實際のカロシユンティ文字の姿、及びその讀解の正否を確かめることがで

きるであらう。これらの斷片には、偈、行、又は碎片の各部分に一一五二六の番號が付けられているから、これを本文中の細かい数字なり、Concordance [ ] なりに當つて見れば、一層明らかになるであらう。

周知のように、本書の著者 John Brough 氏はロンドン大學の梵語教授であり、同大學東洋アフリカ研究所の第一部(インド、パキスタン、セイロンの言語・文化部門)の部長であり、梵・巴・佛教梵語から藏・漢等に至るまで、その造詣は極めて深い。氏によつて從來同研究所の雜誌に多くの貴重な論文が發表され、學界の注目をあびている。特に佛教梵語については、世界最高の學者に數えられている。本書はその該博な知識をもつて、綿密周到に作製されたものであるから、俗語法句經の研究出版としては、今日望み得られる最善のものと言ふことができる。本書によつて、眞の學問研究の模範が示されており、その學の廣さ深さに感歎せざるを得ない。まことに學界の慶事である。(London Oriental Series, Vol. 7, Oxford University Press, London 1962)

## 新刊紹介(7)

## LA KĀSĪKĀ-VṚTTI

(adhya I, pāda 1)

TRADUITE ET COMMENTÉE

PAR

YUTAKA OJIHARA et LOUIS RENOÛ

PUBLICATIONS

DE L'ÉCOLE FRANÇAISE D'EXTRÊME-ORIENT

PARIS

1<sup>re</sup> PARTIE (pp. 124) 1960, 2<sup>e</sup> PARTIE (pp. 128) 1962.